

学内広報

2014.9.24

no.1458



リサーチ・アドミニストレーター＝大学の研究力を強化するプロたち

URAに関する27のQ&A

「体力式アミノ酸ゼリー」が大人気!

コミュニケーションセンターだより

リサーチ・アドミニストレーター=大学の研究力を推進するプロ

URAに関する27のQ&A

念のために聞くけど……

Q.1 URA って「ウラ」?

 いいえ。通常は「ユーアールエー」と読みます。もちろんうらちゃんもそう読んでいます。

Q.3 Research Administrator の略なら「RA」では?

 RA は Research Assistant の略称として使われることが多く、混同を防ぐために University の U をつけて URA と呼ぶようになったようです。

Q.5 では日本だと何人? アメリカだと何人?

 日本国内では約 500 人（『平成 24 年度大学における産学連携等実施状況について』の関連調査より）、アメリカでは約 15 万人の URA が活躍していると言われています。

Q.7 URA ってどこに所属しているの?

 各部署に所属する URA と本部（URA 推進室）に所属する URA の両方がいます。他大では URA を本部に所属させるケースが多いようですが、東京大学では部署に所属して活動を行なう URA のほうが多くなっています。

Q.10 URA っていつもはどんなところにいるの?

 普通の教職員といっしょです。たとえば、p4 で紹介する URA の林さんはこんな部屋（右写真）、同じく村上さんはこんな部屋（下写真）で仕事をしています。



Q.2 URA ってそもそもどういうものなの?

 研究マネジメント等の専門職です。文科省のサイトでは「研究者の研究活動活性化のための環境整備及び大学等の研究開発マネジメント強化等に向け、大学等における研究マネジメント人材」と書かれています。近年、競争的資金の獲得やその管理を含む研究マネジメント業務の増加によって研究者に過度な負担が生じており、そうした環境を改善して研究活動を推進するための人材として期待されているのが URA です。

Q.4 URA って東大にいま何人ぐらいいるの?

 現在、全学で約 20 人の URA が活躍しています。今後はさらに数を増やし、約 10 年後には 100 名程度に拡充する予定です。

Q.6 URA って常勤雇用? 有期雇用?

 どちらのケースもあります。常勤雇用の URA には研究のライフサイクルで高い専門性をもって研究支援業務を実施することが、有期雇用の URA には大型研究プロジェクト等において既得の高い専門性・能力を活かして研究支援業務を実施することが期待されています。現在、優れた有期雇用の URA を無期雇用に転換する仕組みをリサーチ・アドミニストレーター推進室（URA 推進室）が検討しているところです。

Q.8 URA ってどんな服を着ているの? スーツ? 白衣? URA 専用ウェア?

 人によりますが、普通の教職員といっしょです。右の想像図のような特別な URA 専用ウェアを着ているわけではないことは確か。



Q.9 呼び方は「～さん」? 「～先生」? 「～URA」?

 特に決まりはありませんが、普通に「～さん」と呼ばれる場合が多いようです。p4 の林さんのように、研究者時代の名残で「～先生」と呼ばれている方もいます。「～課長」「～部長」のように「～URA」と呼ばれている人はいないでしょう。

Q.11 学位(修士・博士)や資格がないとURAになれるの?

 いいえ、学位も資格も特に必要ありません。本人のやる気と能力があれば大丈夫です。ただし、専門的な能力を持っていたほうが URA としてより活躍できるのもまた確かなことでしょう。そのため、URA 推進室は、研究支援に関する専門的な能力を認定する資格制度の実施に向けて検討を行っています。



林さんの部屋のドアには URA の張り紙が！

リサーチ・アドミニストレーター（URA）をご存知ですか？
「行動シナリオFOREST2015」でも明記されているので、教職員の皆さんなら当然名前は聞いたことがあるはず。でもその実態は？ 実際は何をやっているどういう人たち？ 職員なの？ それとも教員なの？ そうした諸々の疑問を解決するため、27の質問を現場の皆さんにぶつけてみましたよ。



東京大学URA非公認マスコット

うらちゃん

今年度の新規採用職員研修の際に、URAの認知度向上を目指して生まれたイメージキャラクター（作者は医学部附属病院管理課研究支援チームの結城舞子さん）。非公認のマスコットですが、URA特集だと聞いて特別に駆けつけてくれました。

Q.12 URAって学術支援職員や特任研究員とは違うの？



現在のところ、URAという職位があるわけではなく、特任研究員、学術支援専門職員、学術支援職員、特任専門員、特任専門職員などの教職員が、URAという肩書きを加えて活動している状況です。研究支援に携わる教職員にURAという縦串を通すことで専門性を向上させ、より高度な研究支援体制を構築しようとしている最中です。

政策ビジョン研究センター
特任専門職員
リサーチ・アドミニストレーター（URA）
村上 壽枝



URAの村上さんの名刺をお借りしました。

Q.13 URAには職級のようなものがあるの？



いまは未整備ですが、資格制度として、能力・習熟度などで複数段階のURAの資格区分（名称未定）を設ける仕組みが検討されています。その際に必要となるのは、URAのスキルを東京大学として担保するための研修制度の整備。現在、そのはじめの一歩として、50人程度を対象に2日間で行なう研修を2015年2月に実施する計画が進んでいます。

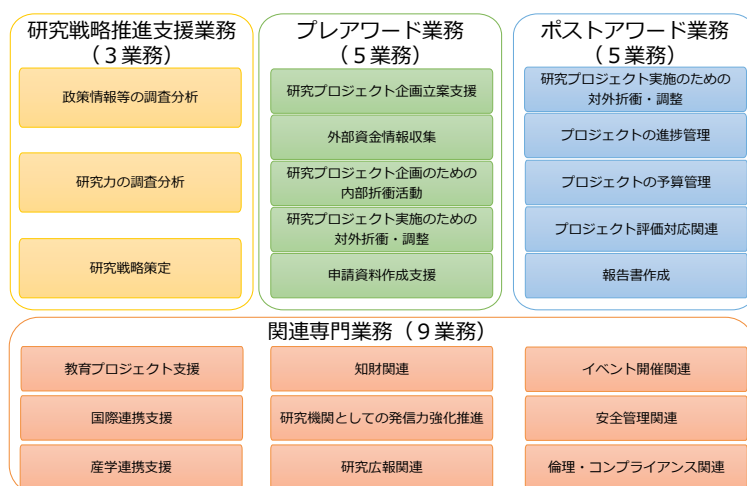
URA推進室では、URAもしくはその類似職の人を呼んで研究マネジメントに関するノウハウなどを講演していただくURA講演会も不定期に実施しています（右写真）。



Q.14 URAって外部資金獲得のプロなの？



もちろん重要な任務の一つですが、それが必須というわけではありません。URAの業務は、政策の分析や学内研究資源の把握などを行なう①研究戦略推進支援業務、プロジェクトの企画から申請までを担う②プレ・アワード業務、プロジェクト採択後の運営に関する③ポスト・アワード業務、その他、産学連携や広報やコンプライアンス遵守などを担う④関連専門業務の4つに大別されます。現場のニーズに合わせてこれらの業務を日々こなすのがURAです。また、URAの業務として一般的に想定されるものが「URAスキル標準」として作成され、文部科学省のウェブサイトで公開されています。



URAの業務内容

Q.15 URAをより詳しく知るには？



URA推進室では、URAの普及のため、電子書籍の発行やシンポジウム開催といった広報活動を行なっています。2013年12月にiTunesで公開した「URAを知っていますか」は、URAとその研究支援活動を知るには最適な一冊です。巻頭には京都大学iPS細胞研究所の山中伸弥先生のインタビューを収録。一線で活躍するURAの生の声や海外のURA事情も知ることができます。初めての競争的資金申請の際に知っておくべき情報を概説した電子書籍「研究生活とキャリアパス」とともに、ご一読をお勧めします。



山中先生は本書の中でURAの重要性を訴えていらっしゃいます（右は本編の1ページより）。



現役URAに聞きました

URAに関する一般的な知識をだいたい頭に入れたところで、つぎは実際に東大でURAとして働いているお二人の生声を聞いてみましょう。URA推進室副室長を務める小関先生のメッセージまで読んだあなたはもういっぱしのURA博士!?

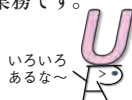
Q.16 いつもどんな仕事をやっているんですか?



私の場合はプレ・アワード業務が中心です。まずはどんなプロジェクトが募集されるかの情報収集。官庁の審議会などに顔を出して情報を入手したら、応募するかどうかの検討に入り、応募となれば準備を開始。申請書やヒアリングの際の資料を作る仕事です。大きなプロジェクトだと添付資料も多く厚さが5cm以上になることも。自分が書類を書くだけでなく、書き手の分担を割り振ったり、進行管理も重要な仕事です。



研究戦略支援業務、プレ・アワード業務、ポスト・アワード業務、産学連携、発信力強化推進と多岐にわたります。政策情報等を収集・分析して先生の判断支援をしたり、申請書や報告書の作成支援、資金確定検査の資料づくりもあります。最先端のことをやる場ですので、官公庁にとっても学内にとっても初の事柄が多く、対外折衝や学内調整も重要な業務です。



Q.18 昨日一日のお仕事を振り返ってもらえますか?



午前中は経済産業省の産業構造審議会の製造産業分科会に行きました。プロジェクトの話というよりは、今後の産業界の見通しについて有意義な話が聞けました。午後は主に資料づくり。19時から東大病院内の国際科学イノベーション拠点で研究を進めるためのワーキンググループに参加しました。病院の先生方が忙しくて夜しか時間がとれないんです。



朝は教職員にコンプライアンスに関する研修を行ないました。本部の新人研修で使うビデオで勉強し、私が講師役を務めました。その後はセンター内の15プロジェクトに関する進捗報告会に参加。途中で中座し、センター長から頼まれていた学内重要会議の判断材料となる資料を作りました。あと、締切が間近なプロジェクトの申請書チェックを行ないました。

Q.19 URAになる前は何をされていたか?



以前は化学の研究者で、2008年まで産業技術総合研究所にいました。触媒で中間体を作るというような研究を30年ほどやりました。東大に特任教授として来て4年間はグローバルCOEのプログラムマネージャーを務めました。



以前は私大の職員でした。教員対応4割、学生対応6割という感じの仕事で15年間ほど行ない、2008年10月に政策ビジョン研究センターにやって来ました。そこからはずっと現在につながる仕事を続けてきたように思います。



Q.21 URAになって大きく変わったことはありますか?



私は産総研時代も最後の数年は主に産学連携の仕事をしていましたので、マネジメントにもそれほどギャップなどは感じませんでした。



前職では縁遠かった国の政策というものに関心を持つようになりました。まだえらそうなことは言えませんが、政策審議会などで提言が少しずつ形になっていくという気がしています。



職員は基本的には職務時間が決まっていますが、URAは教員の都合に合わせてフレキシブルに対応することができます。また、確立された組織だと、この事業はこちら、この事業はあちら、と担当区分が明確ですが、URAの場合は管轄を限定することなくなんでもできる。そこが違うと思います。



理学系研究科
URA
林 輝幸さん



政策ビジョン研究センター
URA
村上 壽枝さん

Q.17 URAになった経緯は?



プログラムマネージャーを務めていた頃に全学でURAの制度作りが始まり、自分が制度設計に関与する縁もあって、URAがこれから重要な役割を果たすことを認識し、学内公募を機に応募し、2012年3月にURAになりました。



私は、あるとき中教審の傍聴に行き、たまたま答申が文科大臣に手渡される場面を見ました。そのとき、自分が関わった仕事が国の政策に関係していることを実感し、体に電撃が走ったように感じました。前の職場に戻るかどうかで悩んでいたのですが、これでふっ切れて決意しました。そのときの感触はいまも続いています。

Q.20 URAを訳すと?



そのまま訳すと「研究管理職」でしょうが、少し味気ないので、「研究総務」。研究に関することは総てやるということ。URAはフラットに分野に接することができ、分野のある研究者とは違う観点で関わるができる、という意味もこめて。



日本語にすると、「研究推進支援者」でしょうか。「研究支援者」よりもっと動きがあるイメージです。

Q.22 URAと一般職員の違いはどんな点にありますか?



職員は基本的には職務時間が決まっていますが、URAは教員の都合に合わせてフレキシブルに対応することができます。また、確立された組織だと、この事業はこちら、この事業はあちら、と担当区分が明確ですが、URAの場合は管轄を限定することなくなんでもできる。そこが違うと思います。



URAの場合は、一般の事務職員に比べるとより研究者や研究現場に近い立ち位置にいますね。物理的に近いということはもちろんですが、いろいろな方々と伝票や人事上の書類をおして接するだけではないので、業務的内容的にもそう言えるのではないかと思います。

Q.23 URAとしてやりがいを感じるのはどんなときですか？



理学部と工学部と東大病院が中心となって国際科学イノベーションの拠点をつくるというプロジェクトで、100億円を要求して半分ほど獲得できたときです。大きな額ということはもちろんですが、申請時に自分が考えた「ソフトエネルギー産業」というコンセプトが採用されたのがうれしかったです。最終的には変更されましたけど。



外務省からシンクタンク育成の補助事業を始めるにはどうしたらいいかという質問があり、多忙な先生方かわりに、外交・医療・食品等の多様な観点から、安全保障について一庶民として理解できる範囲のことを書面にてお答えしました。その結果、育成事業が走り出しました。国の政策に関係していることを実感できるのが大きな喜びです。

Q.24 では、URAとして大変なことは？



いまはCOIのURAもやっているの、立場がいくつもあること。複数の案件を抱えていて同時に進めるときの立場の使い分けに気を使います。また、URAの職位がまだ確立されてないので、将来のことを考えると若い人はやりにくい面もあるかもしれません。私自身はもう歳なので気楽ですが（笑）。



情熱があって前のめりになりがちな先生の支え、でしょうか（笑）。あれもやりたい、これもやりたい、というだけでは進まない場合もあります。組織のことをトータルで考えて、時にはブレーキを踏むということもURAの役目の一つで、そこは大変といえば大変です。

Q.25 URAに向いているのはどういう人だと思いますか？



研究と研究者をリスペクトできる人だと思います。リーダー志向の非常に強い人や、いわれたことだけやればいいと思っている人は向いてないかも。研究組織を助けることに意義を見出せる人がいいんじゃないかな。自分はどうかというと、研究そのものより研究者に興味があります。優秀でまじめな若い研究者にハッピーになってほしいと思う気持ちが強くて、これはURAの仕事と通じる部分がありますね。



先生の研究をより理解したいと思う人、完全に理解できなくても理解しようとする姿勢がある人。先生は、こちらが何をわかっていないのかわからないので、なにがわからないのかをこちらから発信することが大事だと思います。わかったつもりですませずに聞くとか、研究を理解しようとする粘り強さと臨機応変さも必要。大学のシステムと折り合いをつけるセンスがあるとよりいいですね。



Q.26 URAとして教職員に伝えたいことは？



大学の研究力を上げるためにいるのが我々URAです。そういう観点で生かしてほしい。トータルとして大学にメリットをもたらす存在になりたいと思います。面倒なことはなんでもやりますという意味ではなく。



先生がこうしてほしいと思っていることを察して夢を実現するためのフォローをするのは楽しい仕事です。URAの仕事について興味を持ってほしいのと、あとは、自分がURAになることも一度考えてみてほしいなと思っています。

URA推進室 副室長に 聞きました



URA推進室副室長
工学系研究科教授・副学長
小関 敏彦

Q.27 東大のURAは今後どうなりますか？

国立大学法人化以降、外部資金獲得に伴う業務が増えました。膨大な申請書作成のほか、研究員等の雇用の管理、資金の経理処理、シンポジウムやウェブを使った研究成果発信なども必要です。そうした業務が増えた結果、教員が研究にかける時間が減少しました。教員が研究に専念し成果を上げるために必要な人材、それがURAです。URAの育成は大学や国の研究力に直結しますが、日本にはまだその実績がなく、まずは東京大学としてのURAの制度設計が必要です。それをURA推進室が行なっています。室長は松本洋一郎理事・副学長。6人のURA、総長補佐の先生方、事務の方で、月に1度程度の議論を続けています。

主な議題は、URAが有効に機能する状況をどうつくるか、そのために教員と事務職員の中間の立場のURAをどう位置付けるか。非常に重要な問題です。もう一つはURAのスキルをどう担保するか。研究開発の進め方やファンディングの仕組み、経理の処理をわかっていること、研究者とのコミュニケーションが円滑にできること、国の政策を十分理解していること、高い研究倫理を備えることなど、多岐にわたりますが、東大としてそれらをクオリファイする仕組みを整えます。

現在、学内の多くの研究プロジェクトでURA的な仕事をする人がいます。特任研究員などが手伝うケースもありますが、専門家がいるのが有意義なことは間違いありません。また、ポスドクなどの中にはプレーヤーよりマネージャーの才に長けた人もいます。URA制度はそうした人材の受け皿としても期待できます。職員や民間からのほか、研究者からURAになる道もあるわけです。

URAを全学のメリットにするには幅広い視点が必要。URAを知らなかった人にも、この機会に関心をもち、ご意見をお寄せいただきたいと思います。

問い合わせ先：本部研究推進企画課（内線 82259、20484）

教養教育の現場から

第5回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんのレポートでお届けします。

学びの意識を変革する

／初年次ゼミナール

教養教育高度化機構初年次教育部門
総合文化研究科・教授

増田 建

初年次教育の柱となる
少人数チュートリアル授業

「初年次ゼミナール」は、現在、東京大学で進められている学部教育の総合的改革において、初年次教育の柱となる少人数チュートリアル授業です。具体的には、1クラス20名程度の規模で、教員と学生がお互いに顔の見える、きめ細かな指導によるチュートリアル方式の授業を通して、これまでの受動的な知識を授かる形での学びの意識を変革して、能動的に学ぶ姿勢を養うことが大きな狙いです。初年次ゼミナールは、平成27年度より開講される、文系・理系ともに必修の基礎科目2単位の授業であり、Sセメスター（S1・S2ターム連続）に開講されます。この授業を実現するためには、文系70クラス程度、理系100クラス程度の授業を開講する必要があり、この授業の内容設計や実施体制について、これまでに多くの議論・検討を重ねてきました。

各クラスでは第一線の研究者である東京大学の文系・理系の教員が、それぞれの専門性に応じた多様なテーマで授業を展開します。学生は、それぞれの授業内

容が詳しく書かれたシラバスを読んで、受講を希望するクラスを希望順に複数登録します。授業の最初の2週間は大人数講義で行い、ガイダンスや基礎的スキルの講義、クラス希望登録・決定を行う期間とし、第3週目から少人数クラスに分かれた授業が始まります。以上のような、初年次ゼミナールの目的やクラス編成の方法は文系・理系ともに共通ですが、授業内容や実施体制の点で以下のような違いがあります。

文系の初年次ゼミナールは、教養学部で20年近い歴史を持つ「基礎演習」の実施体制を継承し、その内容を発展的に組替えます。全ての授業において、アカデミック・スキル（人文・社会科学における研究技法や研究倫理）を習得させ、検索実習を行います。また教員が専門性を活かした人文・社会科学の学問への導入（アカデミック体験）を行い、その内容を小論文（初年次論文）にまとめます。図書館ツアーなどの課外活動も充実させます。

全理系学部が共同で授業を実施

一方、理系の初年次ゼミナールは、今

までにない全く新しい試みとなります。この授業の実現のために、東京大学の全ての理系学部が共同で授業設計・実施の責任を担います。全ての授業において、サイエンティフィック・スキル（自然科学における基礎的な研究技法や研究倫理）を習得させ、教員がそれぞれの専門性を活かして自然科学の学問への導入（アカデミック体験）を行います。そして、様々なテーマについてグループによる協同学習を行い、その成果をプレゼンテーションやレポート・論文により発表します。

このような授業の中で、科学が抱える多くの正解がない問題について、自ら調べ、論理的に考え、探求する力を養います。また議論を通して自らの考えを説明し、また多様な考えを聴くことで、批判力と建設的に議論する能力を伸ばしていきます。この取り組みを通して、学生の学びの意識を変革させることが出来れば、東京大学における学びを実質的なものにし、学生を更に成長させることが期待できます。初年次ゼミナールは東京大学の新しい挑戦であり、その成功のために鋭意準備を進めていますので、どうかご支援を頂きますようお願いいたします。

アクティブ・ラーニング手法についての教員ワークショップ（アクティブラーニング部門と共催）。



教養教育高度化機構シンポジウム「初年次教育」の開催。



夏学期に開講した「初年次ゼミナール」のパイロット授業。

ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第17回

東郷 太郎

本部留学生・外国人研究者支援課
生活支援チーム係長

教職員の発案で生まれた 留学生のセーフティネット

東京大学外国人留学生支援基金をご存知ですか？

この基金は、1997年に起こったアジア通貨危機の際に、生活不安に陥った留学生を少しでも助けたいという教職員の善意によって設立（当初は外国人留学生後援会）されたものです。現在の主な事業は、年間30名、月額5万円を支給する奨学金給付事業、授業料免除申請不許可時や奨学金入金までのつなぎとして、20万円を上限に貸与する一時金貸与事業、事故、災害での被害や入院などの不測の事態に対し、10万円を限度に給付する見舞金給付事業及び留学生支援団体への助成です。

本基金の奨学金の募集は、一般のものより遅く設定しており、留年した学生や研究生も応募対象とするなど対象をできる限り広げています。また、一時金貸与事業は、学内・学外を見渡しても同様の事業はありません。一時金は、例年10名程度、見舞金は例年1～2名程度に貸与・給付されています。本基金は、まさに留学生のセーフティネットなのです。

一方で、この基金の特徴でもある、教職員からの寄附は発足以来減少の一途で、一時は年間1,000万円以上あった寄附も昨年度は、約600万円となっていました。学外から大口の寄附をいただくことも時にありますが、このままでは、近いうちに事業の縮小を検討せざるを得ないところです。

この状況を打破するために、今一度宣伝活動に力を入れて行きたいと考えています。活動の内容を知っていただければ、きっと沢山の方に賛同いただけるものと思っています。詳しくは「東大基金 留学生支援基金」で検索してみてください。月額500円からの給与天引きも可能です。是非ご協力をお願いします。



奨学金授与式に臨む留学生たち。

東京大学基金事務局 安田講堂改修寄附事業に協力を！

TEL 03-5841-1217 : E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp
内線21217 : URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/



東大オフィシャルショップ

コミュニケーション センターだより

特別版

第94回

体力式アミノ酸ゼリーが大人気です！

東大の研究活動から生まれた商品や東大公式グッズをお届けするコミュニケーションセンター(UTCC)。多彩なラインナップから注目商品を厳選して紹介します。

こんにちは！ UTCC学生スタッフの兼子です。今回ご紹介するのは7月からの新商品「体力式アミノ酸ゼリー」。これまでもUTCCランキング第一位だった「体力式アミノ酸」が、飲みやすいゼリーとなって新たに発売されました。顆粒状では飲みにくいと感じる高齢の方や外出時でも、ストローを差して手軽にアミノ酸を摂取することで、体力を回復したり、日常的な健康を維持する事をサポートしてくれます。さらに味は国産のりんご果汁を使用したりんご味で、美味しく召し上がって頂けます。



8月6日、7日には東大オープンキャンパスが開催され、UTCCも大盛況でした！ 真夏の照りつける日差しの中、スタッフも汗を流しながら店先で体力式アミノ酸ゼリーをお勧めさせて頂きました。オープンキャンパスに参加してくれた沢山の高校生たちも、キンキンに冷えた体力式アミノ酸ゼリーを喜んでくれた様子です。なんと2日間で3,800個の体力式ゼリーを売り上げることができました！



これから涼しくなって参りますが、美味しい「体力式アミノ酸ゼリー」で夏の疲れを吹き飛ばし、食欲の秋に備えてみてはいかがでしょうか。1個¥160 6個セット¥960 18個セット¥2,700 (税込)

オリジナル赤ワイン「マスカット・ベリー-A」

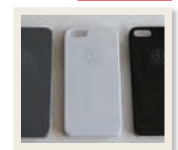


日本のワインぶどうの父・川上善兵衛が生み出した品種が「マスカット・ベリー-A」。善兵衛の研究を支えたのは「お酒の博士」東京大学の坂口謹一郎博士と、博士が引き合わせた寿屋（現サントリーホールディングス）の鳥井信治郎でした。日本の風土に適した品種の開発によって日本のワインの礎を築きました。日本人が生み出したぶどうで醸造した、日本のワインです。¥3,065 (税込)

傷が消えるスマートフォンケース

残量稀少

新領域創成科学研究科・伊藤耕三研究室が発見した「スライドラグマテリアル」由来の耐傷性塗料でボディをコーティング。軽微な傷がついても傷跡が瞬時に回復します。¥2,900 (税込)



http://shop.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp/
10:00~18:00 (月~土) 03-5841-1039

ワタシのオシゴト 第103回

RELAY COLUMN

本部人事企画課
総務企画チーム

金山 慶祐

日々勉強です!



職場は本部棟6階です。

今年の7月に同じ人事部の人事制度チームから異動しました。所属名を聞いてもどんな仕事をする部署かわかる方は少ないと思いますが、部内の総務的な仕事の他、人事部ならではのものとして国の表彰・叙勲申請の準備、本部所属職員の手当等の取りまとめ、就業規則改正の準備などを担当しています。その内容は多岐に渡り、新しいことを勉強する日々です。

いずれのお仕事も人事部内の皆さん、各部局担当者の皆さんとのやりとりや協力が欠かせず、周りの方々には本当に助けていただいています。特に本稿執筆時点は年に2回の叙勲申請時期で、本学は候補者も多く全部局の申請を取りまとめるだけでもなかなかの作業量です。

どうしてもディスプレイと睨めっこして座る時間が長くなるので、休み時間や休日はランニングやテニスなどなるべく体を動かして気分転換しています。もっと実力をつけて「特技」と言えればよいのですがまだまだ「趣味」の域を出ません……。



テニス合宿での集合写真です。

得意ワザ：バックハンドダウンザライン

自分の性格：A型を装ったB型

次回執筆者のご指名：赤迫雅也さん

次回執筆者との関係：教養学部での同僚&母校の後輩

次回執筆者の紹介：優しい力持ち

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第106回

15年目を迎えた
「産学連携(UCR)プロポーザル」

産学連携シーズ・データベース「産学連携(UCR)プロポーザル」は今年で15年目を迎えます。これまでに累計で約850の連携を生むなど、産学連携の架け橋となってきました。

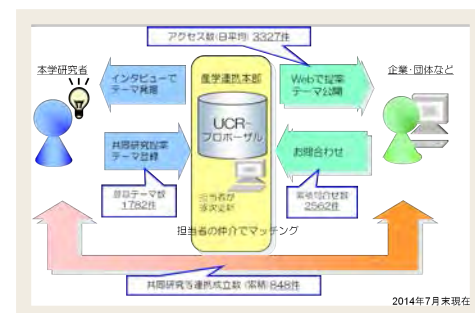
UCRプロポーザルとは、本学の研究成果を社会で活用して頂くため、連携研究が可能なテーマをデータベース化してウェブ上に公開しているものです。ここには学内の研究成果とその応用可能性、研究者の連携希望などが掲載され、学外から研究開発課題に対応したテーマを検索することが可能です。企業・団体等で連携を希望する場合、問い合わせはまず産学連携本部に送信され、担当者は企業と研究者の意向を確認しながら、双方にとって実り多い連携につながるようマッチング活動を行います。

現在、連携テーマが約1,800件公開されており、理系・文系を問わず多様な分野を網羅しているのが特徴です。また、担当者がほぼ全学の研究室を訪問し、先生方とご相談しながら掲載内容を更新しており、常に最新の研究成果を発信できるよう努めています。

このシステムを通して共同研究、委託研究、技術指導など様々な連携が生み出され、その数は年々増加を続けています。昨年は研究室に直接お問い合わせがあったものも含め、143件の連携を創出しました。

大学から社会への提案・発信ツールとして発展してきたUCRプロポーザルですが、学内外での認知度向上と利用促進がさらなる課題となっています。先生方のご指導・ご助力を頂きながら、一層の充実を図っていきたく考えていますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

UCRプロポーザルURL：<http://proposal.ducr.u-tokyo.ac.jp/>



UCRプロポーザルの仕組み。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・ バイブル

第86回

総合文化研究科・教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

石浦 章一

科学のお作法

インチキ論文と認定された人が堂々と自説を展開する時代になったかと少々悲しい気もするが、インチキ論文と分っていないながら論文を発表した人を擁護する人もいるとは、驚くべきことである。私はたまたま小中高大の理科教科書、特に生物・生命科学、を編集する機会があるので、どのあたりから科学のお作法を採り入れているかをご紹介します。

実は、小学校理科の教科書から、「大きい」ひまわりというのは、どういうことか、その定義をはっきりさせないと議論が進まないとか、実験には必ず対照を取らないといけないとか、実験は何度も行って平均値をとる、などの記述が新しく取り入れられている。実験しないで自分で適当な値を入れるとか、他人のデータを盗み見して書き込むなどのことをするなどは書いてないが、これらは科学者として当然のことと先生も教えているはずである。最近の小学校理科の教科書には発表スキルのことも書いてあり、ネットのデータや情報をそのままコピーするな、ということは当然のこと、いまさら文科省が大学に通達を出すのはおかしいのである。

東京大学の生命科学の教科書には自然科学の方法論が列挙してあり、観察対象の明確化、実験観察のデータの重視、追試可能な方法、仮説の検証の必要性などとともに、誤りは正すべきということが書いてある。進化論が検証可能かという点に対しても、検証できない者は科学ではないという意見や検証すべき仮説とそうでないものは区別すべきという意見を併記し、学生に考えてもらおうというスタンスを取っている。問題は中学校と高校で、指導要領の内容にあてはまらないことは本文には書けないというしりばから、枠外にちょこっと書くしか手がない状態である。このような状況では分野横断的な知識や倫理事項は書ききれない。生物の分野でも、今後、認知科学や薬学・医学の知見を採り入れないと、広範な発展分野に参入するのは難しいが、ここは生物、ここは化学、などと言っている場合ではないのである。

他人との接し方や衣食住の作法は家庭でしか学べないことも多いが、科学研究の作法はやはり研究室が家庭の役割を果たすべきだろう。教員の責任は重い。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・ 復興支援室 より

第40回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、
遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(9月～10月)

9月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア
9月～10月	福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア
10月27日	第22回救援・復興支援室会議

ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤 克憲

本学では、岩手県陸前高田市教育委員会及び同委員会に協力する一般社団法人が同市内の中学生等へ行っている学習支援活動に協力して、平成23年12月から現在まで継続的に学生ボランティアを募集し、派遣を行っています（他に福島県へも、同様の学生ボランティア派遣を継続中）。

去る8月24日(日)午前、濱田総長が陸前高田市を訪れ、学習支援活動の様子を視察されました。

総長は活動場所である市内3箇所の小中学校を、陸前高田市教育委員会教育長や一般社団法人の担当課長等から説明を受けながら視察するとともに、参加していた計5名の児童・生徒と本学の学生ボランティア計6名を激励されました。

児童・生徒の中には、活動場所の学校の校庭に建てられた仮設住宅から通っている子もあり、そこには自分の勉強机もなかったりするなど厳しい学習環境にありますが、ここでの学習は学習能力の向上は勿論のこと、勉強途中の雑談によるストレス発散や、大人とも物怖じせず話せるようになったり等、総合的な人間形成の場となっているようで、市からは今後についても継続的な支援を望む声もありました。

ここでの学習によって学ぶことの楽しさを知った児童・生徒の中から、是非本学へ入学する人が出てくることを願ってやみません！

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」。



(左)市立第一中学校での視察の様子。

(右)学生ボランティアから話を聞く濱田総長(左端)。

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html

Email : kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

内線 : 21750 (本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
8月21日	本部国際企画課	「第2回東京大学・ソウル大学学生討論会」を開催	7月31日
8月25日	人文社会系研究科・文学部	平成26年度「文学部夏期特別プログラム」を実施しました	7月30日～8月13日
8月27日	本部研究推進企画課	RU11「グローバル化時代における我が国の責務としての研究基盤の抜本的強化にむけて」記者会見を開催	8月26日
8月28日	本部学生支援課	全国七大学総合体育大会の総合優勝へ、本学運動部が躍動しています！	～8月28日
9月2日	工学系研究科・工学部	第3回高大連携ボーイング講座の実施	7月11日～7月23日
9月11日	広報室	広報誌「淡青」29号を発行しました	9月10日

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
8月28日	本部総務課	平成26年度 東京大学秋季入学式	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2870/
8月28日	本部総務課	平成26年度 東京大学秋季学位記授与式・卒業式	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2871/
9月1日	本部人事給与課	人事異動（教員）	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動（教員）
9月5日	本部企画課	濱田総長と語る集いー教育改革と新学事暦で学生は変わるか	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/events/2912/
9月17日	広報室	部局長交代のお知らせ	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2954/



CLOSE UP

第3回高大連携ボーイング講座の実施（工学系研究科・工学部）



英語を使いながらのうどん作り。



英語でのポスタープレゼンテーション。

東京大学は、2013年より米国The Boeing Companyが展開する教育プログラムBoeing Higher Education Programのサポートを受け、「世界の将来を担うべき優れた科学者・エンジニア」を育成する事業を共同で実施しています。その一環として7月23日（水）に、国際的場面でのプレゼンテーション体験を目的に、埼玉県立浦和第一女子高校（生徒11名参加）、埼玉県立浦和高校（生徒17名参加）と連携して第3回講座を浦和第一女子高校にて開催しました。

開催に先立って7月10日（木）には森村久美子准教授（工学系研究科国際工学教育推進機構）による英語のプレゼンテーション講座を開催し、宿題としてポスターを制作してもらいました。

当日、高校生は東京大学の留学生らからアドバイスを受けながらポスタープレゼンテーショ

ンのリハーサルを行い、その後留学生も加わったグループで小麦粉からのうどん作りをしました。留学生が加わることによってコミュニケーション言語はほぼ英語となり、うどん作りの手順や自分の意思を英語で表現する場面が増えました。これは多くの高校生にとって貴重な体験となったようです。午後のポスタープレゼンテーションでは、リハーサルの成果により堂々と英語で発表する高校生の姿が多く見られました。

講座の最後には留学生らが母国と大学での研究を紹介し、講座終了後も個別に研究について質問にくる高校生もいました。浦和第一女子高校では理系志望の生徒は生物系や医学系に進むことが多いそうですが、今回の講座を通して工学部の留学生と直接話すことができたことは、工学部への関心を高める結果となったようです。

今号の表紙写真について



9月3日（水）に披露された駒場21 KOMCEE Eastです。理系学生必修の基礎実験のための実験室、基礎実験と先端実験の融合を目指す教養教育実験スペース、講義室等で構成されています。Westのスタジオ教室と組み合わせることで、授業と実験、ディスカッションが一連の空間で

実施可能。学生の主体的な学びにつながると期待されます。基礎実験室は、実験空間および実験室と廊下の間をガラスで区切り、安全衛生と教育効果を両立。また、自習室を設け、広い廊下に椅子と白板を置くことで、授業・実験後の振り返りができる滞在型教室棟となっています。



CLOSE UP

「文学部夏期特別プログラム」を実施 (人文社会系研究科・文学部)



竪穴住居跡を発掘中。

7月30日(水)～8月13日(水)の15日間、東京大学文学部とセインズベリー日本藝術研究所(英国)の連携により、学部教育の総合的改革に係る部局別改革プランの一つとして、平成26年度「文学部夏期特別プログラム」を考古学分野中心に実施しました。本学及び東京近郊での博物館実習や文学部附属北海文化研究常呂実習施設(北海道北見市常呂町)での遺跡発掘体験等を通じて、学部学生が異なる価値観に触れながら体験的に学ぶ機会を提供するものです。

プログラムには、文学部と法学部の学生4名、セインズベリー日本藝術研究所によって欧米大

学からの希望者多数から選考された学生4名の計8名が参加。前半の7日間は、学内発掘現場の見学や考古学研究室での実習、近隣博物館の見学等、本学及び東京近郊を中心に行いました。後半は北海道に渡り、大島2遺跡(常呂町)での竪穴住居跡(11世紀頃)の発掘体験や勾玉の製作、土器の接合体験などを行いました。発掘作業は、移植ゴテを使い少しずつ表土を削り、削り集めた土を搬出し、また移植ゴテで少しずつ削るという体力と根気が必要な作業ですが、発掘体験を楽しみながら学生同士の交流も深まり、非常に有意義なプログラムとなりました。



CLOSE UP

第2回「東京大学・ソウル大学学生討論会」を開催 (本部国際企画課)



チーム別の討論の様子。

7月31日(木)、「第2回東京大学・ソウル大学学生討論会」を福武ホールにて開催しました。東大から34名、ソウル大から31名の計65名が参加、『日韓の未来と青年交流』を全体テーマに、下記のお題について3言語で討論を行いました。

【日本語グループ(以下G)】「日韓は『ネットウヨ』とどう向き合うべきか」「日本内の反韓的言論と外交への影響、法的規制の必要性」

【韓国語G】「韓国中高教育における漢字教育に対する提案」「韓流ブームの傾向について」「日

韓両国の三放世代(結婚、恋愛、出産)」

【英語G】「国家安全保障—今日の東アジアではどれほどの軍備が正当か?」「慰安婦像をめぐる日韓の歴史認識の差異とメディア事情」

参加者たちはホワイエで行われた夕食会でも話が尽きず、別の日に再会したり、インターネット上で非公開の意見交換の場を設けるなどして、討論会後も交流を深めました。また、日・韓の新聞社やテレビ局から取材も受けるなど、本討論会は学外からも高い関心を集めました。

第13回東京大学ホームカミングデイ開催のお知らせ (卒業生室)



昨年度の特別フォーラム。

卒業生と大学との交流を深めることを目的として、例年本郷と駒場で開催している東京大学ホームカミングデイが、本年度は10月18日(土)に開催されます。メインプログラム「特別フォーラム」では、「総長と語ろう! “タフ＆グローバル”」を実施。任期最終年度を迎えた濱田純一総長と、各世代の卒業生、在学生が、NHK「ニュースウオッチ9」でおなじみの大越健介氏(1985・文)をモデレーターに、パネルディスカッションを行います。総長の思い、本学の考え方、卒業生のご意見を直接聞く絶好の機会です(「東大HCD」で検索を!)。

第13回東京大学ホームカミングデイ

<主なプログラム>

◆特別フォーラム「総長と語ろう! “タフ＆グローバル”」 ※事前申込不要

時間: 11:10～13:00

場所: 伊藤国際学術研究センター地下2階

パネリスト: 藤森義明氏(1975・工) 株式会社LIXILグループ取締役代表執行役社長兼CEO、猪子寿之氏(2001・工) チームラボ株式会社代表取締役社長、松本麻美氏(2009・教育学研究科) Active Connector CEOほか

◆卒業20、30、35、40、45周年学年会

部局長交代のお知らせ (広報室)

2014年9月4日付で、下記のとおり東洋文化研究所長の交代がありました。

部局名 東洋文化研究所
新部局長 高見澤 磨

※新部局長略歴については、左ページ「お知らせ」のURLをご覧ください。



東洋文化研究所長 高見澤 磨教授(任期: 平成26年9月4日～平成27年3月31日)

広報誌「淡青」29号を発行 (広報室)



表紙は駒場コミブラ横の芝生広場の写真。

本部発行の広報誌「淡青」29号の特集は、「東大生は『タフ』になったのか? 19/27,865人の実例で見る現代学生事情」です。就任以降、「タフになれ」というメッセージを学内外に発してきた濱田総長。そんなメッセージを聞きながら育った学生たちは、果たして「タフ」になったのでしょうか。今号では、学部と大学院を合わせた全学生27,865人の中から19の例を抽出し、問いに対する一つの答として提示しました。ご一読ください。



農学部を取り囲む4本の道

本郷・弥生キャンパスは、半島のように南に延びる本郷台の尾根に沿うように配置されている。そのため、尾根道である本郷通りを歩む限りさほどの凹凸は感じられないが、本郷通りに直交する言問通りや春日通りは山越え谷越えの坂道が続く。

日本橋を起点とする中山道は本郷通りを農学部前まで進んだところで左折する。ここが本郷追分で、最初の一里塚でもある。中山道はるか京都三条大橋まで通じている。7都府県にまたがるロマン街道の最初の一里塚が農学部前ということになる。一方、本郷通りを農学部前で三条大橋方面に曲らず直進すると、それが日光御成道である。日本橋から上野、千住を経由する日光街道の脇街道にあたり、将軍が日光東照宮へ社参する際に利用したという由緒正しい街道である。岩槻藩の参勤交代に使われたことから岩槻街道とも呼ばれる。私は昼時ともなると本郷追分でふと立ち止まり、今日の昼食は何にするかと思案する。日光東照宮方面に行くか、それとも京都三条大橋方面に向かうか。まさに殿様ならぬ将軍気分が味わえる。

一方、農学部の南側に面し、本郷地区との

境をなすのが言問通りである。言問通りを根津方面に1時間ほど歩くと、隅田川にかかる言問橋に出る。「言問」という名称は在原業平の詠んだ「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」に由来する。最後にもうひとつ。農学部の裏手にある野球場と根津神社の間にカーブを描く小さな坂道がある。この道には新坂、権現坂、S坂という3つの名前がある。比較的新しい坂は一般に新坂と呼ばれ、文京区内だけでも他に4つの新坂がある。権現坂は根津神社の旧称である根津権現に由来する。森鷗外は小説「青年」の中で「割合に幅の広い此坂はSの字をぞんざいに書いたように屈曲して」とあり、これがS坂の由来だ。ただし、正しくは逆S字形の坂である。

本郷台が織りなす地形とそこで繰り広げられた歴史に思いを馳せながら、農学部界隈の道を散策してみるのも一興である。

金子豊二

(農学生命科学研究科)